

第4版の序

「がん化学療法副作用対策ハンドブック」はみなさまに支持されてこの度、第4版を発刊することとなりました。今回の改訂では「**攻める副作用対策**」を指針として内容を充実させました。がん薬物療法は3版の発行以降、さらに新しく、異なる標的や作用機序の薬剤が開発され、臨床現場でさまざまながん種に使用されています。また、免疫チェックポイント阻害薬が疾患横断的に用いられるようになりました。したがって、多岐にわたる重篤な副作用を早期に発見し対策することがさらに重要になってきています。本書では、「**早期診断、初期対応（緊急対応）として何をすべきか**」を重点に、初発症状、検査項目を充実させ、具体的な処方例を記載しました。一方、がん薬物療法中に出現する症状が、すべて副作用とはかぎりません、思い込みを排除し、アセスメントできるよう、それぞれの副作用の項目に鑑別診断の必要性についても記載しています。丁寧な指導が必要であるケアや処置に対しても、できるだけエビデンスをつけました。

進行・再発がんでは一次治療が1つと限らず、患者さんの全身状態、社会的背景、高齢者では介護体制なども含めて全人的な視点から治療選択することが求められています。そのためには治療効果だけでなく、副作用も考慮して治療選択をする必要があります。多職種がかかわることで、適切ながん治療が選択され、QOLを保つことができ、結果的には治療が長期に継続できるようになります。

がん治療にかかわる医師、看護師、薬剤師をはじめとする医療スタッフのみなさまが、ひとりでも多くの患者さんから「治療してよかった」との言葉がいただけるよう本書を活用していただければ幸いです。

2024年12月

千葉西総合病院 腫瘍内科 外来化学療法センター
岡元るみ子